

ギブソンのアフォーダンス理論の源泉の一つは、エドウィン・ホルトの實在論的認識論にあるとされている。ホルトはハーヴァード大学出身の若手哲学者たちによって20世紀の初頭に始められた「新實在論」の運動の代表的理論家の一人である。この運動はホルトの他ペリー、モンタギューなどを中心にした6名の哲学者からなり、彼らは1912年には『新實在論・哲学における共同研究 (The new Realism: Cooperative Studies in Philosophy)』という500頁におよぶ論文集を刊行した。彼らの運動はハーヴァードにおけるジェイムズとロイスの論争のなかから生まれたのであり、ロイスの観念論に対抗するために、ジェイムズは「根本的経験論」を構想し、より若い研究者たちは實在論を標榜した。例えばホルトによれば、意識とは世界のうちに存する無数に多様な存在者の一部分であり、身体の神経系という世界の別の一部分によって選択された存在である。外的世界の対象、神経系、心はそれぞれ関係し合いながらも別個の集合を作っており、この関係のなかで生じる第一次観念も第二次観念もともに客観的實在であり、主観的、内面的な表象ではない。しかしながら、このような實在論によって、はたして我々の認識の「誤謬」などは満足のいくように説明されるのであろうか。発表では、ロイスの観念論に対抗するべく提出されたジェイムズの純粹経験の説とホルトらの實在論の異同を簡単に紹介しつつ、認識論としてのそれらのメリットとデメリットについても考えてみたい。